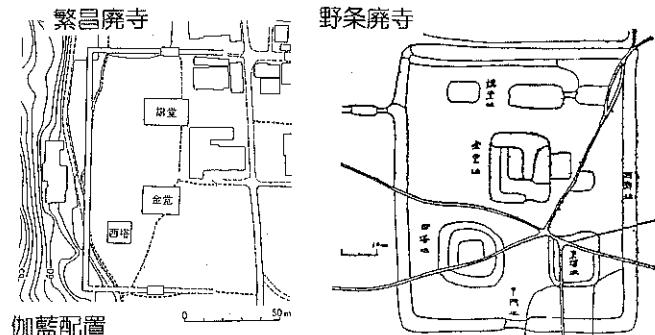


播磨の古代寺院と造寺・知識集団 7

## 賀毛の古代寺院 2 一加古川中流域の古代寺院を歩くー

寺岡 洋

許世部・巨勢部・起勢里



まず前号の補正・追加からです。賀茂郡の人名リストに一人追加します。奈良文化財研究所木簡データベースを未確認でした。

「許世部破 播磨國鴨郡」

を追加し、木簡による人名は、児嶋部口、佐伯部豊嶋、口国廣山、民直豊国と5名になります。

木簡で許世部(こせべ)の居住が確認されるのは重要で、この木簡の出土により『播磨國風土記』に記載される、「起勢里(こせのさと)、……巨勢部(こせべ)等、此の村に居りき。仍(よ)りて里の名と為す」という記事の信頼性をさらに高めました。

小野市域には加古川東岸の平野部に古瀬(こせ)という地名が残っている。西岸には河合廃寺・新部大寺廃寺が立地し、また、南は加古川支流・東条川の対岸に広渡廃寺が所在する位置である。

賀毛郡は12里からなり、巨勢部は里名になるほど有力な氏族であって、おそらく里長も巨勢部氏であろう。王権構成メンバーである大和の巨勢氏とも当然関係あったと考えられ、賀毛郡の寺院建立候補であるが、既多寺の知識写経には参加していない。針間国造(はりまこくそう)とは異なる「地域小集団」(栄原永遠男)を形成していたのであろう。

ちなみに、『播磨國風土記』編纂時(713~715年)の播磨国守は巨勢朝臣邑治(おおじ)(許勢祖父とも)であり、巨勢部氏の本家筋にあたる。

同じ文脈の記事も見直される。「穂積里(ほづみのさと)……今、穂積と号(なづ)くるは、穂積臣等の族(やから)、此の村に居り。故(われ)、穂積と号く」というもので、穂積臣氏も知識写経に加わっていないが、寺院建立を主導し、或いは、「知識寺院」造立の参加者(知識)であったであろう。

### 既多寺(キタジ・ケタジ)の読みについて

二つ目の補正は既多寺の読みについてです。「キ

タジ」と読みましたが、「ケタジ」も有力です。今津勝紀氏の論文(「日本古代の村落と地域社会」『考古学研究』199 考古学研究会 2003年)によって紹介します。

既多寺の「既」は、上代特殊仮名遣いでは「キ・ケ」の音価をもつので、「キタ」と確定するのは困難である。大智度論巻82奥書には「気多寺」とあり、「氣」も「既」と同じく「キ・ケ」の音価をもつ。「既・氣」を漢音で発音すれば「キ」になり、吳音であれば「ケ」になる。奈良時代の寺院の発音は吳音で継承されるのが通常である。(例が一例挙げられており)西大寺(さいだいじ)を漢音による「セイダイジ」とは読んでいない。気多の音は通例では「ケタ」であって、「ケタジ」であった可能性は十分に考えられる。もっとも、キタとケタは通用する場合があり、音から所在を推定することは結局のところ困難である、というのが結論になる。

但馬と因幡には氣多(ケタ)郡があり、日本海側に多く氣多(ケタ)神社が分布する。「氣多文化圏」という発想もあるから関連するかもしれない。

賀茂郡内でケタの地名を探すと万願寺川の支流に芥田(ケタ)川があり、殿原廃寺のすぐ近くで合流している。芥田川沿いには下芥田・上芥田などの集落があり、峠を越えれば多可郡中町へ通する。

### 吸谷(すいたに)廃寺・吸谷窯跡(東瓦谷窯跡)

補足が長くなりましたが、散歩に戻ります。殿原(とのはら)廃寺から西へ万願寺川を渡り、中国自動車道をくぐり、北条の街の西、吸谷廃寺へ向う。鴨谷への道には入りそこなう。直線距離で約5km。

賀毛地域には谷のつく地名が多いが、吸谷は三方が山で東にのみ視界が広がる。北と南には市川流域への道があり、おおかたの古代寺院が交通路沿いに立地するのと較べはなはだ異なる。

新築された公民館とその西の観音堂（慈眼寺）周辺が吸谷廃寺跡の調査地である。雨が降ってきたので観音堂で雨宿りしながらお昼に。

観音堂の境内には、円形造出（つくりだし）や地覆座（じふくざ）などをもつ見事な礎石と塔心礎が置かれている。これらの礎石群が古代寺院に伴うものであるのは明らかだが、古い時代（観音堂は江戸時代末の建立の由）の開墾によるもので、残念ながら出土した場所が分からず。1992年調査時に確認された礎石は33個だった。弘安六年（1283）銘の石造五重塔もある。

吸谷廃寺については、以下の資料によります（鎌谷木三次「吸谷廃寺」『播磨上代寺院跡の研究』成武堂 1942年）、『吸谷廃寺』加西市教育委員会 1992年。「吸谷廃寺（第2次）発掘調査 現地説明会資料」1996年）。

92年の調査地は観音堂西側の一段上がった場所で、今は公園になっており子供（？）が作った石仏・羅漢さんが並べられていた。

遺構は主軸をほぼ同じくする掘立柱建物跡が2棟とさらに重なってもう1棟出ており、共伴した須恵器の年代は7世紀中葉～後半の時期とされる。建物は僧坊跡かとも推測されているが、不明。

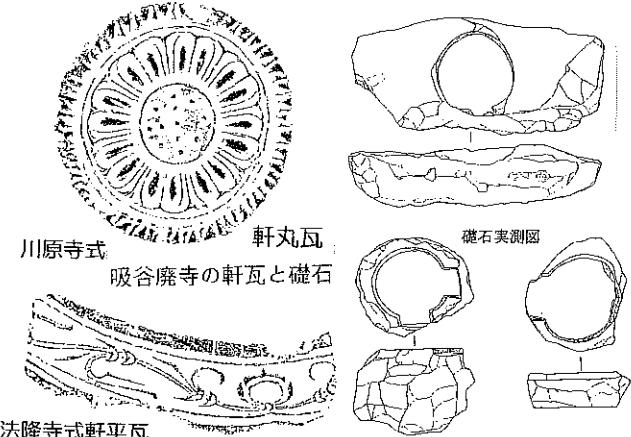
96年の調査地は新しい公民館が建つ地点である。寺院の建物遺構は検出されなかったが、珍しいものとして、2個の柱穴が東西に2.5m間隔で並んで見つかった。寺院を莊嚴（しょうごん）するための幢幡（どうはん 憧幡）を立てた柱、幢竿支柱（どうかんしちゅう）跡と推定されている。幢竿支柱跡は託賀（たか）郡になる西脇市・野村廃寺（上ノ段（うえのだん）遺跡）でも4対見つかっている。

寺では法会や様々な行事に幡を立てるが、この連載でも法隆寺命過幡（めいかばん）について触れた（「法隆寺命過幡と山部連・飽波評君・大窪史」『むくげ通信』234 むくげの会 2009年）。

この2回の調査により、吸谷廃寺の伽藍は観音堂と公民館の間に立地していたと推測されているが、具体的な建物は明らかになっていない。

### 吸谷窯跡（東瓦谷窯跡）

吸谷地区には三つの谷があつて三本指の形をしており、そのうち東南方の谷のどんづまりに吸谷窯跡の看板が立っている。廃寺から約200m。道から池の堤が見える。農道があり軽四なら行ける。



鎌谷木三次氏によれば、窯跡は深い谷の谷頭を堰き止めて造った溜池の東側崖面に存在したようである。農作業している人に尋ねたり、それらしき遺物を探したが痕跡は見つけられなかった。

吸谷廃寺・吸谷窯跡から出土した軒瓦は、軒丸瓦が2種、軒平瓦5種があり、創建瓦は瓦の外縁に面違鋸歯文（めんたがいきょしもん）で装飾される複弁八葉蓮華文（ふくべんはちようれんげもん）軒丸瓦と、四重弧文軒平瓦がセットとされる。

### 瓦の系譜 川原寺式と法隆寺式

創建瓦の文様は明日香村に残る川原寺（かわらでら）の瓦を祖形とし、「川原寺式軒丸瓦」と呼称され、賀毛地域では吸谷廃寺のみ見られる。類似する文様を採用する寺院は、郡域を越え神崎郡になる市川流域の溝口廃寺、多田廃寺で知られる。

軒丸瓦は川原寺式であるが、軒平瓦には「法隆寺式」の均整忍冬唐草文（きんせいにんどうからくさもん）のものがあり、新部大寺廃寺（小野市）、繁昌廃寺（加西市）の瓦当文様とほぼ同じであり、文様の崩れたものが野口廃寺（加古川市）から出土する。この瓦の文様を共通する寺院の造立集団はなんらかの関係を持っていたと考えられる。

播磨での法隆寺式軒平瓦は、新部大寺廃寺例が最古の例になり、繁昌廃寺例とは同范（どうはん）の可能性があるが、やや文様にシャープさが失われていると指摘されている（竹原伸仁・津川千恵「播磨の法隆寺式軒瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくり』Ⅲ奈良文化財研究所 2005年）。

軒丸瓦は川原寺系で市川流域の集団と、軒平瓦は法隆寺式で加古川流域と関係あるというように、瓦からみた吸谷廃寺の造立集団は賀毛地域のみではなく広い範囲でつながっている。このことは、造寺

そのための集団（知識であろう）が広範囲に形成されたことを意味するものと考えられる。

### 修布里の品遅部村・當麻品遅部君前玉

吸谷廃寺が所在する里については、修布里（すふのさと）と上鴨里の2説あって悩ましい。「広峯神社文書」（応永二年（1396））には、「須富（すふ）庄」があり、その庄名は明治維新まで用いられてきたそうで（鎌谷木三次）、須富庄比定地が吸谷であれば、修布里が有力になる。

修布里には品遅部君氏の名に由来する品遅部（ほむじべ）村があり、その先祖は「品遅部等が遠祖（とおつおや）前玉（さきたま）」とある。上鴨里の記事には「當麻（たぎま）品遅部君前玉」と明記されるので、大和葛城の豪族との関係が推測される。吸谷廃寺の建立集団はともかく、品遅部君氏が主導する知識寺院が修布里に建立された可能性はある。

### 加西市埋蔵文化財整理室 玉丘史跡公園

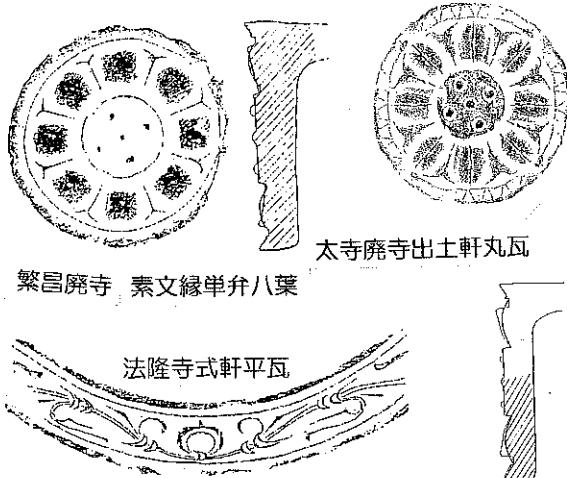
北条の街に戻り、市民会館の東隣にある加西市埋蔵文化財整理室へ寄る。加西市域出土の瓦や黒福（くろふく）古墳群出土の初期須恵器などが展示され、遺跡の小冊子や現説資料も置かれている。黒福古墳群は1990年に発掘調査が行われ、昔、現地説明会に出かけた（「播磨園風土記散歩10」「むくげ通信」124 1991年）。報告書等は道を挟んだ北側の市役所の教育委員会で購入できる。駐車場は市役所南側の駐車場を利用する。

### 玉丘史跡公園

市役所から東南へ1kmばかり、玉丘古墳（前方後円墳 全長109m）を盟主とする玉丘古墳群25基のうち玉丘古墳周辺が史跡公園に整備されている。今回は公園内を散歩したのみで先を急いだ。

### 繁昌（はんじょう）廃寺

玉丘史跡公園から南西へ4km弱、繁昌廃寺へ。廃寺跡は低い南北にのびる丘陵（工業団地になっている）の東麓、地名通り繁昌町山ノ脇に立地する。東には普光寺川が南流し、万願寺川とY字形に合流する。万願寺川上流の殿原廃寺とは南北に約5km、加古川本流西岸の河合廃寺・新部大寺（しんべおおでら）廃寺とは東南へ約2.5kmの位置になる。



廃寺跡は現在田圃になっている。おおよそ、乎疑原神社の北側100~200mぐらいの範囲。発掘調査が行われている（『播磨繁昌廃寺—寺跡と古窯跡』加西市教育委員会 1987年）。

伽藍跡は、南門・西塔・金堂・講堂・北門・築地跡などが調査され、双塔の薬師寺式伽藍配置と推定されている。推定東塔跡は地下下による削平とトレンチ調査のみであったので遺構の詳細は不明。寺域は、東西約84m以上、南北約123mになる。

建物の規模は、金堂基壇が東西約18m×南北約14m、西塔基壇一辺約14m、講堂基壇東西約22m×南北約15m。伽藍は出土した瓦により、金堂→西塔→東部遺構（東塔）→講堂→北門→南門の順に建立されたと推定されている。

創建時期については、報告書（高井悌三郎）では7世紀末から8世紀初頭とされる。そして、平安時代前期ころまで存続していたようである。

出土遺物は、瓦類、土器類、金属製品（銅製獸脚、銅製相輪（そうりん）残欠、釘など）がある。

### 瓦の系譜

瓦類については報告書（菱田哲郎）で詳細な検討がされている。瓦の文様や作り方の特徴は、造立集団の関係・ネットワークを具体的に表現すると考えられ、寺院建立実態の一端を窺うことができる。

繁昌廃寺の金堂・塔・講堂など主要伽藍の屋根を飾った軒丸瓦I型式（素文縁单弁八葉）は、文様、周縁が三角縁状を呈する形状などから太寺（たいでら）廃寺（明石市）出土例と共に、線鋸歯文の有無などから太寺廃寺例が先行するとされる。

つまり、繁昌廃寺より太寺廃寺の建立が早く、両寺を建立した知識集団は共通する文様の瓦をもつ

ほどの親縁関係であったことが推測できる。

文様に関しては、「繁昌廃寺の創建瓦、広渡廃寺例とは同工異曲であるが留意しておきたい」との異見もある(井内功・井内潔『東播磨古代瓦聚成』井内古文化研究室 1990年)。

ところで、平瓦A型式(凸面布目瓦)とされる平瓦は、広渡廃寺にも出土例があり、井内説をも参照すれば、繁昌廃寺と広渡廃寺は地理的にも近距離だが、造寺集団の関係も近かったようである(太寺廃寺→繁昌廃寺→広渡廃寺)。

軒丸瓦I型式とセットになる軒平瓦I型式(忍冬唐草文)は流麗な法隆寺式軒平瓦で、吸谷廃寺で紹介したように、新部大寺廃寺→吸谷廃寺→繁昌廃寺→野口廃寺とつながっている。

#### 平瓦(ジグザグ縄叩き)にみる河内との交流

繁昌廃寺で出土した平瓦のうちDII型式と名付けられた平瓦は、凸面にジグザグに縄叩きを施すという際立った特徴をもっており、系譜関係の推定が容易であるとされる。

播磨では、広渡廃寺、新部大寺廃寺、石守(いしもり)廃寺(加古川市)で出土している。いずれも、布目密度や製作技法などに共通性が認められ、同一の工人集団の製品の可能性が高い。

このジグザグに縄叩きを施す瓦は、近隣では柏原市の東條尾平(ひがしんじょうおひら)廃寺、片山廃寺、智識寺(大平寺廃寺)跡、藤井寺市の林(挾師)廃寺、土師寺、国府遺跡(衣縫廃寺)、堺市美原町の丹比(たんび)廃寺など、中・南河内に分布する。

播磨の例と河内の例の間でも、平瓦の大きさや製作技術の上で共通性がみいだせるので、地域間の工人の移動、あるいは交流を物語るものとして重視できる、と指摘されている。

このジグザグ縄叩きにより平瓦を装飾(?)するという特異な事例は、播磨の加古川流域と河内の寺院を建立した知識集団がネットワークを形成していたことを裏付ける重要な資料と評価できる。

また、繁昌廃寺・広渡廃寺・新部大寺廃寺はともに双塔伽藍(薬師寺式伽藍配置)であることも注目される。日本列島に22ヶ所しかない双塔伽藍は播磨と河内に集中しており、次号で取上げたい。

#### 式内・乎疑原神社(繁昌天神)

先に繁昌廃寺を紹介しコースが前後したが、加西

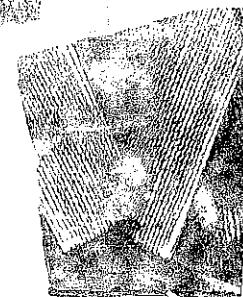
ジグザグ縄叩き平瓦

繁昌廃寺出土(左図)

天神山窯跡(下図)



戯画(美女?)



工業団地の中を南に下ると、左手(東側)に乎疑原神社の表示と社叢が現れるので、左折する。

鳥居脇に五尊像石仏(模造)が安置される。本物は奈良博に寄託されている。五尊像石仏は奈良時代前期の作で、繁昌廃寺の遺仏と推定されている(「繁昌天神森石仏」「播磨古法華山石仏と繁昌天神森石仏」甲陽史学会 1959年)。

#### 天神山窯跡—繁昌廃寺の窯跡

乎疑原神社境内から北に抜ける小道があり、報告書では道の傍らに天神山窯跡の表示があるが、場所を確認できなかった。瓦専用窯。ここでは、ジグザグ縄叩き(「縄目波状帯叩き」)の平瓦が出土している。戯画風の線描きが見られる瓦片も混じる。

#### 野条(のじょう)廃寺

下里川東岸の低丘陵(標高約50m)に野条廃寺跡が残る。繁昌廃寺から南西へ直線距離で約4km。玉丘史跡公園から県道716号線(玉野倉谷線)を南下し、左手の丘陵に大型鶏舎が見えたら左折する。鳥インフル予防のため、一般車両は進入禁止。

1936年に記録された「略測図」によれば、南北約80m、東西約70mの方形の土壘と、その区画内に数ヶ所土壘が残っている(赤松啓介「播磨における初期仏教文化」「古代聚落の形成と発展過程」明石書店 1990年)。伽藍配置は双塔を備える薬師寺式と推定されている(東塔は未確認)。

今年3月、西塔跡基壇(鶏舎の東側)が調査され、平安時代初期の播磨国府系瓦が出土したが、白鳳・奈良時代の瓦は全く出土せず、塔の創建年代は平安時代初めと推定されている(「野条廃寺跡」加西市教育委員会HP・文化財調査)。